

オープンスクールでの授業実践

－ 4年1組冬まつり －

三原 典子*・荘司 泰弘**

The study on Learning practice with Open School

－About 「The Carnival in Winter」－

Noriko MIHARA* and Yasuhiro SHOJI**

キーワード：オープンスクール、チームティーチング、授業実践、幼小連携

1. はじめに

子ども達が、ほとんど毎日過ごす場所、学校。私は、日々子ども達と接していて、ふと思うことがある。学校が、子ども達にとって本当に過ごしやすい場所になっているだろうか、ということだ。朝から下校まで鳴るチャイムの音や、「何々してはいけません」を始めとして、「次はこのようにしなさい」、などという先生からの多くの指示によって一日が過ぎてしまいがちな学校。

子どもとは、本来、好奇心のかたまりで、何にでも興味関心を持ち、興味関心を持ったならば集中して行動するものだと私は捉えていた。しかし、今の小学校では先生からの指示がなければ行動できない指示待ちの受け身の子どもが多くなっている。子ども達が受け身の態度をとるのは何故かを考えると、やはり先生が主体的になっているからではないだろうかという考えに至ってしまう。つまり、先生が子ども達を一生懸命に教えよう教えようと努力すればするほど、子ども達は先生の指示通りに行動すればよくなるため、主体的な行動をとることができなくなってしまふ。子ども達は自分たちの力を信じ、もっと主体的に行動できないものだろうか。また、子ども達を主体的にさせるような場を設定することはできないものだろうか。

*三原典子 宇部市立川上小学校 **荘司泰弘 山口大学教育学部

2. 子どもの学習環境について

ルソー (Rousseau Jean Jacques 1712-1776) は、著書『エミール』の冒頭で、「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手につるとすべてが悪くなる。人間はある土地にはほかの土地の産物をつくらせたり、ある木にはほかの木の实をならせたりする。風土、環境、季節をごちゃまぜにする。犬、馬、奴隷をかたわにする。すべてのものをひっくりかえし、すべてのもののかたちを変える。(中略) なにひとつ自然がつくったままにしておかない。人間そのものさえそうだ。人間も乗馬のように調教しなければならない。庭木みたいに、好きなようにねじまげねばならない」^(1-*) と言っている。赤ちゃんとして生まれてきた子どもも生まれながらにして善であるという性善説にたった子ども観・人間観をルソーは持っていた。また、人間が物の自然の状態を無視し逆らい自分勝手にしていくありさまをルソーは批判している。『エミール』の冒頭を現代の教育に当てはめて考えてみよう。人間の手にはわたるとすべてが悪くなるというのはどういうことだろうか。私は日頃の自分を反省する意味も含めて学校の先生という言葉に置き換えて考えてみた。すなわち、先生が子ども達の前に立って一方的にしゃべってしまったり、子ども達に一生懸命に教えようとしたりするあまりに、教え込んでしまう授業、および、子ども達の行動の一つひとつに対して不安で、何から何まで手をかけすぎてしまう、子ども達は先生が手をかけてやらなければ勉強をしないというように、心の中では完全に子どもを信じ切っていない自分、またそうしなければならなくなってしまいうような日々。したがって、子ども達は自分から進んで学習に臨まなくても、先生の言われるとおりに動いておけば、何とか時間は過ぎて行くことになる。一方、先生の方も自分の思うように授業を進めていくために、子ども達に対して「〇〇してはいけません」「〇〇しなさい」に始まるような禁止・命令事項で子ども達を縛りつけてしまいがちになる。また、私自身をふりかえてみても、頭ではやってはいけないとわかっているながらも、指示・命令・干渉をしてしまうことが多く、自分を情けなく思うことが多々ある。大人でも禁止事項に縛られたならば、苦痛となり、やる気をなくしてしまう。当然、子どもも苦痛になるだろう。私はいろいろ考え、悩み、「教職に就いている年数が長くなるにつれて、自分の思う理想の先生からかけ離れていってしまうなあ」と振り返り、今のままでよいのだろうかと思ったのだった。

モンテッソーリ (Montessori Maria 1870-1952) は、子どもを注意深く観察することによって、子どもには環境から吸収する精神があり、子どもに整えられた環境を与えることが大切である、と考へて実践した教育家である。モンテッソーリ以前の教育では、先生が子ども達に教えるという方法で教育していたが、モンテッソーリの教育では、整えられた環境も教育の重要な要因として考へられた。「先生はこども達との関係の他に、環境との関係を持っています。同様に、(こども達の立場から見れば)先生との関係を保ちながら、環境との関係も維持します」^(2-*) 「整えられた環境のまず第一の目的は、成長の途上にあるこどもを、できる限りおとなから独立させることです。すなわち、その場所では、おとなの直接的な手助けなしに、こどもが—自分のためにいろいろなことをする自分の生活ができるのです。したがってこの環境では、先生はより消極的であり、こども達はますます積極的でなければならないのです。こ

こは、こどもが自分の生活をどんどん指揮し、自分を教えることによって、自分の力を意識するようになる場所です。こどもがおとなに依存している状態にある限り、本来の成長をとげることはできません。しかし整えられた環境で自由に生活することによって、こどもは環境とのきわめて大切な交流を始めるようになり、それが自分の好みにもなるのです。環境への愛着は、決しておとなに對する愛情を排除するものではありません。排除すべきなのはおとなへの依存関係なのです。(中略)しかし教師であろうと環境であろうとその役目は、こどもが自分の努力で完全な人間になろうとするのを助けることです」^(2-b)という描写からもわかるように、人的環境としての先生のあり方が重要であることが分かる。同時に、現代の小学校教育においても、私の不安な思いを解決してくれる一つの糸口となってくれるような気がした。すなわち、整えられた環境を子ども達に与えるのが先生の役目であり、先生は子ども達が積極的に学習や作業に取り組むことができるように、初めから子ども達に教え込むという態度をとるのではなく、子どもとの距離を置き、少し離れた所から子どもの様子を観察することにより、子どもを理解していく努力をしていく態度に徹するということになる。モンテッソーリは、物的な環境として、清潔にすることや、整理整頓を言ったが、人的環境としての教師のあり方に対しては、実に多くの細かい指示をしていたのではないかと考えられる。自分のクラスで子ども達に接する時の自分を頭に浮かべてみた。一方的に先生が主導権を握って進めていく一斉授業では、子どもの学習に対するさまざまな個人差に応じられないことから、自分自身焦りを感じてしまう。個人差を考える時は、学習が遅れている子どもだけではなく、学習が進んでいる子どももいるわけだ。したがって、何か発展課題を与えるなどをしなければならないのに、同じ時間に同じことを勉強することになる一斉授業では、子ども達一人ひとりに良い学習環境が与えられているとは思えない。また、私に忍耐力が足りないために、子どもの可能性を信じてじっと待つ、ということが難しいことも反省事項として挙げられる。また、体調が良くない時は、どうしても子ども達に当たってしまうことさえある。

以上のことから、子ども達を学習の主体者にするためには、今までの学習環境とは違う環境を準備する必要があることがわかる。そこで、今回はオープンカリキュラムを考える際の学級の枠・学年の枠・時間の枠・教科の枠の中で、時間の枠と教科の枠、さらに学級担任の枠をゆるめたカリキュラムを作成することから見直していくことにした。つまり、子ども達が大人に依存しなくてもすむような学習を仕組むために、私は子ども達自身に時間の調整を頼んだり、子ども達自身が学習内容を決めたりすることを企画してみようと考えた。

3. 授業実践

4年生もあと残すところ2カ月という時になって、私は、クラスの子ども達に学習パッケージによる学習をしてみないかと提案してみた。学習パッケージとは、(1)学習目標(2)標準的な学習時間(3)より小さくした学習課題(4)使用することができる学習素材(5)評価の仕方などを書き入れた学習の手引きをもとにして、自分のペースで学習を進めていく自学学習である。私は、まず、国語科の教材である「体を守る仕組み」を使って、学習パッケージによる学習を行った。何故、学習パッケージによる学習を行ったかという、理由は2つあ

た。まず、一斉授業のままで、先生のペースで子ども達に学習内容を教え込む、という現状に甘んじていて、研究意欲の薄れた自分に対して挑戦してみたいと思ったためと、もう1つは、クラスの子も達一人ひとりの個性・学力・学習への取り組み方を考慮し、生かすには、学習パッケージによる学習が最適だと考えたからだ。上記のように学習の手引きを作成し、私は子ども達に8時間を与えてみることにした。

入学以来、初めての学習パッケージによる学習を、子ども達はどのようにして進めていくだろうか、正直なところ不安な気持ちが私にはあった。学習パッケージによる学習は、子ども達の自学自習する力をつけることを目的としているため、先生としての私は、みんなの学習ペースを把握しておかなければならない上に、何よりも、子ども達がきちんと学習に取り組むことを信じて、根気強く待つことが要求される。一方、子ども達も、決められた時間内で学習を進めていくということで、あたかも自分で道を切り開いていくかのように努力していかなければならない。両者それぞれの思いで学習パッケージによる学習は始まった。実際に学習を進めてみると、遊んでいる子どもがいるのではないだろうか、と思っていた私の不安をよそに、全員が学習パッケージによる学習に取り組んでいた。ただし、全員いつもと同じ机の向きのままで、つまり、黒板に向かったままの姿勢で学習を進めている。私は、子ども達に座り方までも先生は決めてしまっていたのかと、残念に思うと共に、ここまで子ども達の自由を奪っていたと考えたと、子ども達に対して申し訳なく思った。

私のクラスでは、給食時間は誰と机を並べて食べても良いし、机も好きな所に動かして食べても良いことにしている。そこで、子ども達に、次のように指示した。

「給食の時と同じように、仲良しの友達と一緒に勉強してもいいよ。机も好きな所に動かしてもいいよ。でも、一人で勉強したいと思ったら、一人で勉強してもいいよ」

すると、やったーといわんばかりに、大喜びで子ども達は机を動かして、また学習を続けていった。時間が進めば進むほど、子ども達は学習パッケージの進め方に慣れてきたようだった。子ども達の中には、自分一人で学習を進めていく者もあれば、友達に聞きながら学習を進めていく者もいた。また、鉛筆が止まったままの子どもには、私の方から声を掛けていくようにした。また、発展課題も用意して、早く学習を終えた子ども達に対して対応していった。

今回の学習パッケージによる学習での感想を子ども達に聞いてみた。

- | | |
|-----|--|
| Nさん | パッケージは最初はかんたんだったけど、最後の方になるとむずかしくなった。けど、一人のペースでできたのでよかったと思う。 |
| Oさん | 自分で進めないといけないのでむずかしかった。でも、友達とできるので楽しかったともいえる。 |
| Mくん | パッケージは自分なりに進めるし、どうしてもわからない所は先生に意味を少し教えてもらったりしたので、とても楽しかったです。 |

などと、難しいが自分のペースで進めることができるので楽しかった、という意見がほとんどだった。私は4年生になると、学習環境さえ整えておけば、自分達で学習を進めることができるのだなということ、子ども達から知らされたのだった。

そこで、私はもう一つ手掛けていることを、子ども達に提案してみようと決めた。4年生の3学期の学習には次のような教科・教材がある。

国語科	しの広場
社会科	雪国の暮らし
音楽科	冬の歌
体育科	表現運動

私は、上記4教科をひとまとめにした学習をしたいと考え、仮のテーマを「冬」にして、子ども達に話す事にした。子ども達に学習の進め方の希望をきいてみたところ、「先生が今までのようにみんなの前に立って、しゃべっていく授業はいやだという人は手を挙げてごらん」という私の問いに対して、何と「はい」と手があがった。学習パッケージによる学習の味をしめたのだろう。子ども達の希望は学習パッケージのように、学習できる環境を整えておいてほしいということだった。そこで、私は子ども達に次のような提案をした。

総合学習「？」計画大作戦

2月になったら総合学習を計画したいと考えています。そこで、今回は“木の実のカーニバル”を成功させたみんなにいろいろと計画をたててほしいと思います

1. テーマを決めよう 「？」の部分みんなで考えてみよう。
2. テーマのもとになる学習

国語科	しの広場
社会科	雪国の暮らし
体育科	表現運動
音楽科	冬の歌

3. どんな内容の学習をしてみたいですか。

アンケート形式で、B5版の紙を子ども達に配付した。以前“木の実のカーニバル”（平成7年度教育実践研究指導センター研究紀要参照）で、同じように学習課題を自分達で考えた経験から、今回も自分達で考えてみないかと提案した。子ども達の考えた意見は以下の通りだった。

国語 詩の本を作る。

社会 あたたかい土地とさむい土地のちがいを調べて新聞にする
キャラクターを決めて雪国のくらしをまんがや新聞にする

音楽 作詞作曲する。

体育 ひょうげん・げき（言葉なし・雪に関係がある）

国語＋音楽 作った詩に曲をつける。

音楽＋体育 曲を作っておどりを考える。

などと、いろいろな考えが出てきた。そこで、もう少し細かい内容を考えてもらおうと、仮のテーマを決めた。つまり、雪国や冬の歌というところから、テーマ「冬」として、さらに考えてみよう、私も一緒にやった。そして、次のように決定した。

雪国のくらしについて学習しよう

- 資料、カードを使って雪国のくらしについて学ぼう。
- 雪国の食事の工夫についてのお話を聞こう。（学校栄養士の児島先生による）
- 本や新聞にしてまとめよう。

冬の歌を作って歌おう

- 「冬の歌」（2月教材）を歌ってみよう。
- 作曲の方法についてのお話を聞こう。
（事務主任主事、かつ、ブラスバンド部指導者の白木先生による）
- 冬の詩、冬をイメージした曲を作ろう。〈コースA〉曲は既成の曲を使う。
〈コースB〉詩、曲共に作る。

冬をイメージした表現運動をしよう

- 表現運動とは何か？（4年2組担任 出雲先生による）
- グループに分かれて表現したい物を決めよう。

以上のように決定した。そして、最後にテーマをみんなで考えることにした。学級会で話し合った結果、テーマは「4年1組冬まつり」になった。学習内容が決定したので、私は学習の手引きや、カード、資料づくりを始めることにした。

総合学習の手びき

(標じゅん18時間) 4年1組 ()			
0	雪国の人々は、雪からくらしを守るために、どのような工夫をしたり、知恵をしぼっているでしょうか。調べましょう。		
1	長岡市の人々のくらしについて調べよう。 日本で寒くて雪の多い地方について調べましょう。 雪からくらしを守るための、工夫や努力について調べましょう。 道路や鉄道をどのようにして守っているかを調べましょう。 雪国の冬の仕事について調べましょう。	教科書 p.70-75	資料その他 プリント1 地図帳資料 「明るい雪国へ」 (新潟県) 資料1, 2
2	山古志村のくらしについて調べましょう。 さかんな産業について調べましょう。 道路を守る工夫を調べましょう。 ここまでできたら、先生にノートを見てもらいましょう。	p. 76-79	
3	今まで調べたことを使って、雪国の暮らしを絵本または新聞にしてみましょう。		
4	学校栄養士の児島先生の「雪国の食生活」について、お話を聞きましょう。		
5	冬の詩を作ろう。 冬をイメージするものを探して詩を作ろう	p.74, 75	友達の詩 詩のおもしろさ
6	冬をイメージする歌を作りましょう。 「作曲のやりかた」について、白木先生のお話を聞きましょう。 <Aコース>できた曲に詩をつける。 <Bコース>作った詩に曲をつける。		
7	冬をイメージしたものを体で表してみよう。 「表現とは何か」出雲先生のお話を聞きましょう。 身近にあるものを使って曲に合わせて体を動かしてみよう。 グループに分かれて、動きで表してみよう。(題を決めて動きを考えよう)	p.50, 51	
8	総合学習の学習発表会をしよう。		

いよいよ総合学習「4年1組冬まつり」が始まった。さすがに、国語科「体を守る仕組み」を、学習パッケージを使って学習しているだけに、学習の手引きを見ながら作業を進めたり、机も仲良し同士で並べたり、と慣れたものだった。ところが、今回は国語科の「体を守る仕組み」の学習パッケージの2倍の時間を自分たちで進めていかなければならないので、子ども達には気合いが入る一方、戸惑う子どももいた。そこで、私が用意したのが、総合学習のやくそくとやり方だった。大きな約束は、友達に迷惑をかけないということだった。細かく言うと、①おしゃべりをしないようにしよう。②トイレには先生の許しをもらわずに静かに行きましよう。の2つだった。総合学習のやり方は次のようになる。

1. 学習の手引きを見ながら、自分がその日に学習したいと思うことを決める
2. 学習の手引き、資料を使いながら学習を進めていく。
3. 計画・反省表にその日にやったことを書いて先生に出す。

私は、子ども達に自分の持っている力を信じてほしいと思った。つまり、常に先生の指示がなければ動くことができないような受け身の態度ではなく、自分の力で学習を進めていくことによって主体的に取り組んでほしいと思った。先生が子ども達の前に立たない・しゃべらないという学習では、子ども達が自分の力を信じて、学習の手引きを使ったり、友達と協力したりして学習を進めていくことが大切になる。もう1つ大切なのは、子ども達自身が自分で自分を調整する力（自己調整力というのでしょうか）が必要になるということだ。先生が子ども達の前に立つという従来の授業では、板書された字をノートに写す時間も、教科書を読む時間も、すべて先生が調整してくれる。でも、子ども達が自分で自分を調整する力はつかない。たとえば、体調のよくない時にはあまり無理をしないようにしたり、今日はこの内容の学習をしたいなあ、と自分で考えたりして、自分で自分をコントロールしていく力をつけてほしいと思ったのだった。また、常に机とイスという決まり切ったスタイルで学習するのではなく、時には広いスペースを使って学習を進めていくことも可能であることを、子ども達にわかってほしいと願っていた。オープンスペースという言葉は教室と廊下、あるいは、教室と教室との間仕切をつけたり、はずしたりすることでできる広い場所、という捉え方を先生も子ども達もしがちであった。しかし、子ども達が学習や作業をしたりするスペースは、従来の造りの学校であっても、子ども達の机やイスを1つにまとめて置けば、広い場所がワークスペースになることが可能になる。したがって、子ども達には、必要ならば自分たちの教室の中でワークスペースも作ってもよいことを指示した。初めての総合学習は、子ども達も、私にも、まだペースがつかめず、あっと言う間に終わった。

総合学習③④時間目になると、初めての時とは違い、社会科の分野の学習をする際に、家から社会科事典を準備している子どもがいた。また、一体何をしているのだろうと近くに行ってみると、社会の教科書を広げて、わからない言葉の意味調べをしているではありませんか。今まで私が主導権を握っていた従来の授業では、宿題にしなければなかなか自分たちでは調べなかったはずなのに、今までの授業では見られない子どもの姿に、少し私はショックを受けた。中には道具をすべて忘れてきて、ずっと遊んだり、友達の地図帳を眺めて過ごす子どももいた

が、ほとんどの子ども達が自分のやりたい課題に取り組んでいた。また、前日欠席をした、ある子どもは、連絡帳に“そう合にひつようなもの”と書いて、赤えんぴつで丸く囲んでいた。

今回「4年1組冬まつり」を実施するにあたり、私は同学年の先生に企画案の時点、そして、学習の手引きの制作途中と、お茶を飲んだり、雑談をしたりする時間等に、何度も一緒にやらないかと誘ったり、学習の手引きを作った時点で、複数の先生が必要であることがわかったため、協力してほしいと何度もお願いをした。しかし、時期的に、学年末を迎える忙しい時期という理由や、時間がかかるからということで断られてしまった。もし、公開授業として当たっていたら、受諾してもらえただろうが、どうも校内研修の公開授業が終われば研修も終わり、という安易な考えが多少残っているように私には感じられた。でも、子ども達のことを思うと、私は諦め切れなかった。何度もお願いをして、同学年のある先生には、彼の専門であるアクション、表現運動を教えてもらえることになった。したがって、表現運動のところだけは1組2組の子ども達と一緒に学習することになった。また、幸せなことに、私の勤務する川上小学校にはプラスバンド部の顧問として、本校の子ども達を指導している事務主任主事がいたり、子ども達と関わりを持ちたいがために、わざわざ本校に転動してきた学校栄養士がいた。そこで、音楽、特に作曲の仕方を事務主任主事をお願いし、雪国の人々の食事については、学校栄養士の児島先生をお願いした。

毎日の給食でお世話になっているものの、実際に自分たちのクラスの勉強のために、わざわざきていただいている、ということに子ども達は感激しているようだった。また、前日に1度顔合わせをしていたため、児島先生も子ども達もリラックスしているように私には見えた。ただ、総合学習の1つなので、子ども達の中には、自分たちの新聞作りのために、メモを多く取る人もいて、真剣さが増していた。児島先生のお話は、今から5、60年前で、車が発達していないため、スーパーにも行くことができない上に、除雪力もない時の食生活についてだった。かて飯（大根葉と大根を小さく切ってゆで、塩に漬け、ご飯に混ぜたもの）の作り方の話や、野菜の冬囲いのお話の後、実際に塩漬けしていないかてを試食した。子ども達は、「味がなーい。でもおいしい」と言いながら、雪国の食生活を味わうことができ大喜びだった。さらに、前もって学校栄養士の児島先生をお願いをしていたため、2月の給食の献立には雪国の食生活を意識して、青菜ご飯・はりはり漬・野沢菜漬・のっぺい汁を入れてもらった。子ども達は学習後、学校栄養士の児島先生にお礼の手紙を書いた。

児島先生へ

この前は、「新がた県の食事についてお話ししてくださってありがとうございました。むずかしい言葉も少しありましたがとてもわかりやすくて“そばのかす”などをみせてくださってありがとうございました。絵やわらなどを用意するのにとてもくろうしたのでしょうね。児島先生が「新がた県の食事」について教えてくれたのでよくわかりました。ありがとうございました。(I・S)

今日はどうもありがとうございました。とてもおもしろかったです。どこがおもしろかったかという言葉です。知らない言葉がたくさんあって別世界って感じがして食べ物に魅力が感じられました。これから今日教わった言葉を使って家族をびっくりさせたいと思います。それにしても、食べ物にも工夫があったなんて知らなかったです。ありがとうございました。(M・N)

さつまいもが、水あめになるということが耳をうたがいそうになるほどびっくりしました。これだけはなかなか頭からはなれないと思います。児島先生はおそくやってくれて分かるように説明してくれるのでとてもいいと思います。でも、少し分からない言葉があったのでこまりました。今日はぼくたちのために時間をつぶしてくれてありがとうございました。とてもよかったです。(J・M)

今日学習したことで頭に残ったことは米をあんなにも工夫して食べるということです。かての上にごはん、最後にまたかてという順番でたいていきます。ほとんどかてを食べてばかりでまんぞくできるのかなあと思いました。あさづけ・寒づけと説明してもらいました。ぼくはやっぱりぬかづけが好きです。今度ぬかづけが給食に出たらいいなと思いました。(U・M)

次は「作曲について」だった。4年生ともなると、音楽の授業に対して好き嫌いがはっきりとしてくる。したがって、以前も木の実のカーニバル（教育実践研究指導センター研究紀要第7号参照のこと）の取り組みをした。また、専門の先生に教えてもらう喜びを子ども達に味わってもらいたいということで、本校の事務主任主事であり、開校以来ブラスバンド部の顧問をしていて、本校の校歌も作曲した白木先生に「作曲について」話していただいた。

子ども達の中の音楽経験の違い、すなわち、ピアノ・バイオリンなどを個人的に習って音楽に興味を持っている子どもや、合唱団の活動や、ブラスバンド部の活動をしている子どももあれば、音楽の授業は嫌いで、運動の方が大好きだといわんばかりの態度をとる子どももいることを考慮しようと思い、私は“冬の歌を作ろう”というテーマで2つのコースを設け、白木先生にはコース別のお話とコース共通のお話をさせていただいた。

Aコースは、既成の曲に詞をつけるコースだった。まず、自分の好きな曲を決めた。次に、「冬をイメージできるものは何か」を考えた。そして、音符の数・言葉の字数をそろえることの大切さを、実際に曲を決めて具体的にお話しされた。余談になるが、白木先生の「冬の歌にはどんなものがあるか？」という問いに対して、子ども達の答えは『雪』・『たき火』・『お正

月』ぐらいで、『雪の降る町を』を知っているか？」と聞かれた時、ほとんどの人が「知らない」という方に挙手したことは驚いた。と同時に、少し寂しく思った。

Bコースは詞・曲共に作るコースだった。詞・曲、共に作る場合は、作詞・作曲の両方を並行して作ることがよくあるパターンだそう。ただし、人によっては、どちらかが先になるということもあるそう。そして、次にメロディーの流れ（作り方）のパターンを図式化された。実際に、私がドレミファソラシドと音階を弾いて、白木先生が、「ドーシラソーファミレド」と『もろびとこぞりて』を歌われた。子ども達はリズムの変化で曲になることを知ったようだった。最後に長調での曲の終わり方と、短調での曲の終わり方と共に、曲作りの際は4小節または8小節が基本となるため、実際には8小節から16小節が必要であること、また、詞の文字数が同じぐらいの方がよいことも、付け加えて教えて下さった。私も、子ども達と一緒に教えていただいた。

冬をイメージしたものを身体で表してみようという学習では、4年2組担任の出雲先生に教えていただいた。2時間とも2組との合同体育だったが、2学期に2クラスから3クラスへとクラス増となった学年なので、1学期には同じクラスで生活していたり、木の実のカーニバルでがんばった仲間でもあり、楽しくできたように思った。

出雲先生は、昔はJAC (JAPAN ACTION CLUB) に所属され、活躍されていた先生であった。したがって、身体で表現するというのを、とても得意とされる方だった。そこで、お願いすると、「ちょうどうちのクラスも表現運動をしようと思っているから、一緒にやりましょう」という返事が返ってきた。そこで、「きれいは、やわらかい」と題して、特に手を中心に、やわらかくするというはどうか、実際にネコの手を表しながらやっていった。子ども達の興味を引いたのは、やはり、「僕が実際にJACで仕事をしているときによく練習していた運動だけ」というひとことだった。子ども達はプロの先生に教えてもらえる喜びと、一種の優越感を持っていたようだ。タオルを持ってきて表現したり、小さなボールで表現したりしていくうちに、子ども達は緊張が取れていった。そして、出雲先生による授業は終わった。

学校栄養士の児島先生・事務主任主事の白木先生・4年2組の出雲先生という3人の特別講師による授業が終わり、子ども達は学習の手引き書にそって、学習を続けた。私の役目は、子ども達が何か質問に来た時にヒントを与えたり、教えたりすることと、本当に私が、“つきっきりでもそばにいて教えてあげたい”と思う子どもと一緒に学習することだった。たいていの子ども達は、友達同士で相談したり、考えたり、話をしたりして学習を進めてた。でも、子ども達の中には字を読むことはできるものの、学習内容をなかなか把握できなかったり、今までの一斉授業で学習についていけなかった子ども、いつもお客さんのごとく、静かに、学習内容がわからなくても、板書されていることをノートにただ写すだけの子どももいた。私は、つきっきりで子どもと学習をした。資料の文章さえ読もうとしない子どもだったが、ほめたり、励ましたりした結果、みんなと同じところまで学習することができた。子ども達はびっくりし

て、「すごいー。がんばってやればできらーやー」と言って、彼の努力をたたえた。すると、今度は「自分たちも頑張らなければ」という気持ちになってきたようだった。ところが、18時間を自分たちのペースで、ある程度自由に進めることができるとは言っても、やはり、中だるみが出て来る頃になった。そこで、私は「石鹸を使って手を洗っていらっしゅい」と言った。子ども達が手を洗っている間に、私は箸と皿を家庭科室から教室へ持って来た。そして、子ども達に、「雪国にはかて飯があったね。漬け物もあったね。野沢菜やたくあん漬もあったね。宇部市には何かないかな。阿知須には阿知須の寒漬があるよね。さがしてみたら小野にあったんだよ」(ここで、輿割漬と板書した)「こうわれづけ?なに?」という声が出た。そこで、「こしわりづけ」とかなをつけた。いよいよ宇部市小野特産の輿割漬の試食をすることになった。ただ食べるのではおもしろくありません。班ごとに紙を配って、中に入っているものを書いてもらうことにした。食べ終わってから紙に書く班もあれば、少し皿の上ののせてみて考える班もあった。正解は、キュウリ・ナス・ダイコン・ニンジン・タケノコ・シソの実・ユズ皮だった。子ども達の中に、しょうゆとか、ユズの皮と書いていた班もあり、感心した。ちょっとおいしい気分転換ができ、子ども達はほっとしたようだった。それから、総合学習の続きをした。曲作りもなかなかのもので、コンサートのように分担を決めているところもあった。一方、雪国の新聞作りや、絵本作りも始まっていた。休み時間には、白木先生に自分たちが作った曲を見せに行った人もいた。

学校では1年生から6年生までが特別教室を使うため、「今、音楽室を使いたいな」と思ってもなかなか使えないということがよくある。しかし、どうしても合奏の練習がしたいと思った子ども達は、授業中にジャンパーを着てベランダで練習したり、自分たちの休み時間を使ったりして、練習時間を確保していた。今までの一斉授業の時には見られなかった様子に、私は驚きの連続だった。同時に、ふだんはおとなしい人や、教科に区切る授業では好き嫌いをはっきりとさせていて、嫌いな教科の時はやりたくないという態度を見せていた子ども達も、頑張っている姿をうれしく思った。

残り時間が少なくなったある日、私は学習発表会のことについて子ども達と話し合いをした。多くの学習内容をどうやって発表しようかと悩んでいたからだ。今まで特別に講師として教えて下さった先生方にも相談してみた。その結果、1時間目から4時間目すべて使って発表したらどうだろうか、ということになった。子ども達とプログラムを考える時も、楽しくなるようなプログラムにしようと提案した。子ども達が考えたプログラムは次の通りだった。

1. はじめの1歩
2. みつけた冬
3. やわらかフレッシュ
4. 雪国レポート
5. 小さな冬
6. 終わりの1歩

子ども達全員が、それぞれ自分が担当するところを決め、担当するプログラムの時は、教室移動を始め、進行すべてを担当した子ども達に任せることにした。したがって、本番まで自分たちでどのように1時間を過ごすのかを考えなければならないことになる。クラス全体としての準備は前日に1時間使ったが、あとは発表会に向けて、それぞれの分担した所で準備していただくだけだった。

いよいよ4年1組冬まつりの日がやってきた。はじめの1歩で開会だった。「みつけた冬」では、冬をイメージした詩を作って、一人ひとりが読んだ。画用紙には次のように書かれてあった。「注意 大きな声 はっきりと はずかしがらない ゆっくりと」。全員でクジを引き、読む順番を決めた。自分の名前を忘れずに言うことができる子どもや、終わりますの言葉まで言うことができた子ども達がたくさんいて、うれしかった。全員が詩の発表を終えても、時間が余っていた。どうするの心配だった。すると、担当者から次のような指示があった。「全員の詩を読んでいきます。誰の詩かわかったら手を挙げて下さい」。担当者が読み始めると、元氣よく子ども達は挙手した。正解者にはごほうびとしてシールが出された。

次は「やわらかフレッシュ」だった。「みんな体育館に並んでいって下さい」と担当者が言った。全員で体育館に行った。体育館に着くと、「Trfの曲にあわせて準備体操をして下さい」と言われ、音楽にのって準備体操をした。表現運動では4グループに分けて発表した。冬をイメージした表現であるという意識からだろうか、白いセーターを着て表現するグループがあった。また、吹雪を表現する時に、ヒューヒューと声を出してかけまわるグループもあった。全体的に表現にかける時間が短かったためだろうか、仕上がりにもうひと工夫ほしいなあという感想を持った。私が表現運動そのものに対しての標準時間を設けなかったためだったのではないかと反省した。時間が余ったので、雪玉リレーをした。担当者より雪玉リレーの説明があった。B. G. Mもかかり、気分はまるで運動会のようなようだった。

「はじめに新聞発表をします。磁石は自由に使って下さい」の一言から「雪国レポートが始まった。新聞発表が7グループあり、絵本発表が1グループあった。一人で頑張って作って発表した子ども・分担を決めて発表したグループ・一人ひとりが思ったことを発表できたグループ・はずかしがらずに発表できたグループというように、どのグループの子ども達も自分たちの力を出して取り組めたように思った。

「小さな冬」ではオリジナル曲2曲を含め、12曲の発表だった。私が一番心配していたところだった。音楽の授業が好きな子ども、嫌いな子どもがいて、はたしてうまくいくだろうかという不安な気持ちを持っていた。ところが、曲作りの時から、音楽の授業の嫌いな子ども達さえ、音楽室を使える時間はいつかと尋ねてきた。発表を終わり、「さらばフレッシュ」の終わりの言葉で、総合学習「4年1組冬まつり」の学習発表会を終わった。

4. 反省と考察

総合学習「4年1組冬まつり」は、白木先生・児島先生・出雲先生のおかげで部分的ではあったが、*Team-Teaching*（以後T. T）を組みながら、学習を進めていくことができた。T. Tのおかげで、担任である私と相性の良くないと思えるような子どもも楽しく学習に取り組むことができた。また、任せられる子ども達には、ある程度を任せ、本当に私の援助を必要としている子どもにつきっきりで、援助や指導をすることができて良かったと思う。T. Tを組み合わせるありがたさは、子ども達の個性を生かしていけること、たとえば、子ども達にとってみれば、担任である私だけではなく、3人の先生に勉強を教えてもらうことができ、先生の話し方一つをとってみても、「あの先生の話し方はよかった」と感じられるくらいに、複数の先生方に教えてもらう利点というものが挙げられる。と同時に、自分の子ども達への話し方はどうだろうか、振り返る材料にもなった。当然のこととして、子ども達は、専門的な知識を得ることができ、学習も深まり、大きな収穫となった。また、学習の手引きや、資料をもとに、友達と協力したり、自分の力を信じて、本当に自分たちの力で学習していく楽しさや、難しさを学んでくれたことと思う。

私は、今回の実践を通して、2つのことを学んだ。子ども達を積極的に活動させたかったので、子ども達の前に立ってしゃべるといふ、今までの一斉授業のような態度を私はとらずにいた。すると、総合学習の時間がたつにつれ、また、子ども達の活動が軌道に乗って来るにつれて、私は、「先生である私の役目は何だろう？」とふと考えてしまった。今までの授業で、あまりにも子ども達に対して、指示・命令・干渉が多かったので、どこことなく寂しい気持ちにさえなってきた。ところが、子どものある日の日記を見て私は悟ったのだった。

—「そう合」—

今、ぼくたちは学校で、そう合というべんきょうをしていました。ぼくたちはさいごのひとつだけでひょうげんをしたらもう終わりです。白木先生や児島先生といずれも先生に教えてもらいました。白木先生には音楽を教えてもらいました。児島先生に生活のことや食べ物のことを教えてもらいました。おまけに給食にまで食べ物を出してもらいました。いずれも先生には、ひょうげんのきほんを教えてもらいました。発表日がもうすぐなので、はりきってやろうと思っています。これからも気合いを入れてはりきっていこうと思っていますので、おうえんしてください。(Y. M)

私は、彼の“おうえんしてください”という一言で、「おとなは、学校の教師であろうと、家庭にある人であろうと、つねにこどもを励ます立場にいなければなりません。それは、生命の息吹きをまもり、力づけるデリケートな仕事です。そのために、先生は、こどものことばと行為を、すばやく理解してやらなければなりません。一部のおとなたちにありがちなような、こどもがなにかを見せにきたとき、なげやりなむとんちゃくな態度をみせつけたり、自分にとってもっと必要なことを先にするために、こどもの言動を無視したりするような行為はつしまなければなりません。むしろ先生は、辛抱づよい聞き役にまわり、こどもが疑問を持っていい

ばそれをどこまでも追求する必要があります。われわれが念頭におかなければならないのは、こどもは弱くて、経験の浅い存在であり、このため判断があやふやだということです。こどもがおとなのところへやってきて、励ましだの承認だの説明、あるいは確認を求めるのは、こうした理由なのからです」^(2-c)と、モンテッソーリが言わんとしたように、私の役目は子ども達を励ます役目だったのだと自分で悟った時、初めて心の中がすっきりとして、あぁよかったと思うことができた。また、環境さえ用意しておけば、子ども達は学習することができるうえに、先生から一方的に主導権を握られている今までの授業よりも、生き生きとして主体的に学習に取り組むことができることがわかった。ただ、反省すべき点や、一考を要する点多々あった。第一の点は、総合学習と言うことで子ども達にすすめさせたものの、本当に総合的な学習内容となっていたらどうか、ということだ。総合学習は『教科・領域の個別的な枠を払い、子どもの全人的発達を目的として、総合的に進められる学習を意味するが、「生活学習」とも称する生活単元を編成して進める総合学習や、教科・領域のある部分は意図的に残し、各教科、道徳、特別活動などをできるだけ総合して進める総合的学習がある。』⁽³⁾という考えがあるが、総合学習と、いわゆる、合科学習が、私自身の頭の中で、双方は異なる学習だということが、まだあやふやであるということだった。第二の点は、先生としての私の立場についてだった。総合学習「4年1組冬まつり」を実践する際に、私は「子ども達を私が教えなければならない」という、教師としての役割観念に駆られることはなかった。ただ、“子ども達の興味のないことをいかにして子ども達に興味を持たせるか”という、教師中心の立場の発想で、学習を仕組んでしまったということ私は反省しなければならない。つまり、子どもの立場に立って考えると、“子どもの興味のないことをいかにして子どもに興味を持たせるか”ではなく、“子どもの興味のあることは何なのか”をまず考えて、学習を仕組まなければならなかったのではないだろうかと思う。すなわち、私は子どもの観察が足りず、発想も教師としての立場であって、子どもの発想を大切にしない幼児教育の発想が欠けていたのではないかという点が明確になった。ルソーは、『エミール』で「教育上の術学的な妄想にとりつかれているわたしたちは、子どもが自分ひとりですっとよく学べることを教えようとばかり考えて、わたしたちだけが教えることのできることを忘れている。」^(1-b)と言っているが、教職に就いてからの私を振り返ってみるに、教職年数が増えるにつれて、「先生としてしっかりしなければいけない」と、あせってしまうようになってきた。また、von Kinderと学生時代の講義で習っても、実践になぜもう少し生かしていけないのだろうか、と自分自身、時に自己嫌悪に陥ることさえある。今後は、子どもの興味のないことをいかにして興味を持たせるか、という教師中心の立場ではなく、子どもの興味のあることは何か、という子ども中心の立場になって考えていく学習の実践と、すべてを教え込まなければならないと言う教師から、子どもから学ぶことのできる先生への意識改革を課題として、日々の実践に努めたいと思っている。

幼稚園教育学の始祖、フリードリッヒ・フレーベル (*Friedrich Fröbel* 1782-1852) は、教師という言葉が嫌いで、キンダーガルテン (*Kindergarten* 子どもの園) には保育者 (*Kindergartenerin* 庭師)、大人や教師 (*Lehrer* 指導者) ではなく、シュピーレンデ・エルヴァハセン (*Spielende Erwachsene* 遊ぶ大人) という用語を使っていた。当然の権利のように、

大人が子どもを指導（命令・制限・干渉）することに疑問を唱え、「子どもの人権」を訴えた。外部から与えられた知識技能では、人間は受け身になり、外部から指導する人がいないと実力を発揮できない。たとえ、大人から見て稚拙な知識技能であろうと、自分自身で学んだ体験でなければ、一人ひとりの持ち味を発揮できないと確信するフレーベルは、子ども達同士が異年齢同集団という信頼関係において、試行錯誤しながら学び合う方法を幼児教育の根本原理にした。日本では幼稚園と訳されたキンダーガルテンは、文字通り、子どもの園であり、先行体験を有する子どもと、未体験の子どもとの関わり（遊びに見られる自然な命令・制限・干渉活動）の中に、学習効果を求める施設である。大人が「大人を意識して」子どもを指導する場合には、子どもの人権が無視されがちになる。したがって、キンダーガルテン（子どもの園）にいる大人は教師ではなく、先生（先に生きている子ども）であり、「遊ぶ大人」でなくてはならない。遊ぶ大人 *Spielende Erwachsene* とは、遊び心を有する大人という意味だけではなく、3歳児・4歳児・5歳児と対等な立場で体験を伝え合う、30歳児・40歳児・50歳児になることを前提としている。3歳児と30歳児がお互いの人権を認め合い、単なる体験年数の違いがある遊び仲間として、教えたり、教えられたり、他の子ども達の活動から学んだりする、子どもだけの遊び場がキンダーガルテン子どもの園と言える。

引用文献

1. 『エミール』(上)

Jean Jacques Rousseau 今野一雄 訳
岩波書店
1983年
a. pp. 23. L. 1-6
b. pp. 99. L. 12-13

2. 『モンテッソーリの発見』

E. M. Standing 佐藤幸江 訳
エンデルレ書店
1987年
a. pp. 384. L. 10-11
b. pp. 385. L. 14-pp. 386. L. 9
c. pp. 454. L. 19-pp. 455. L. 3

3. 『学校用語辞典』

牧 昌見
ぎょうせい
1990年
pp. 669. L. 38-44